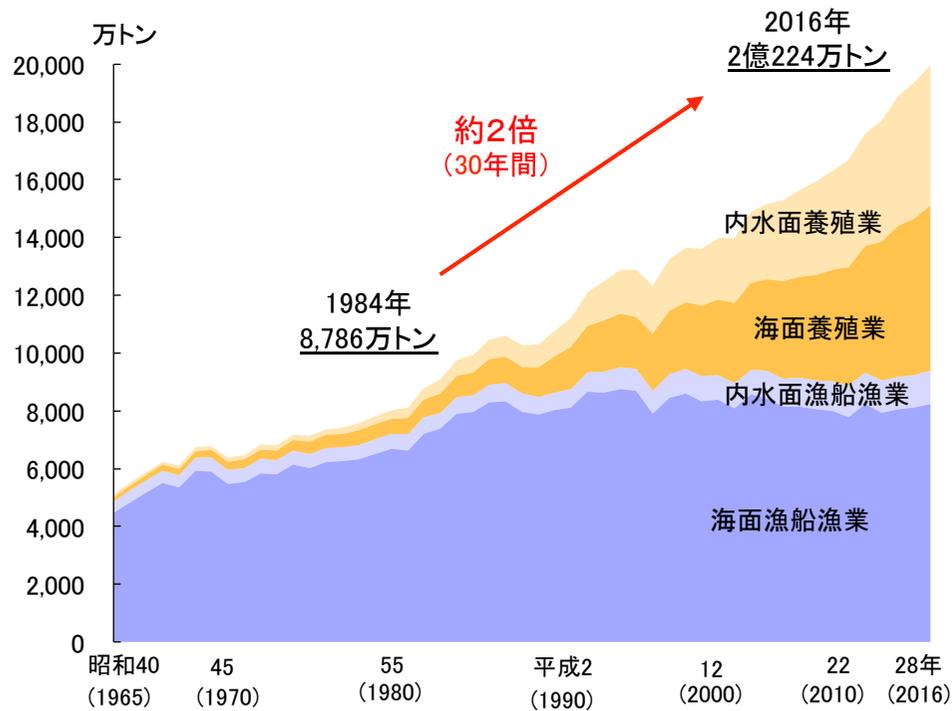


# 世界及び日本の漁業生産量の推移

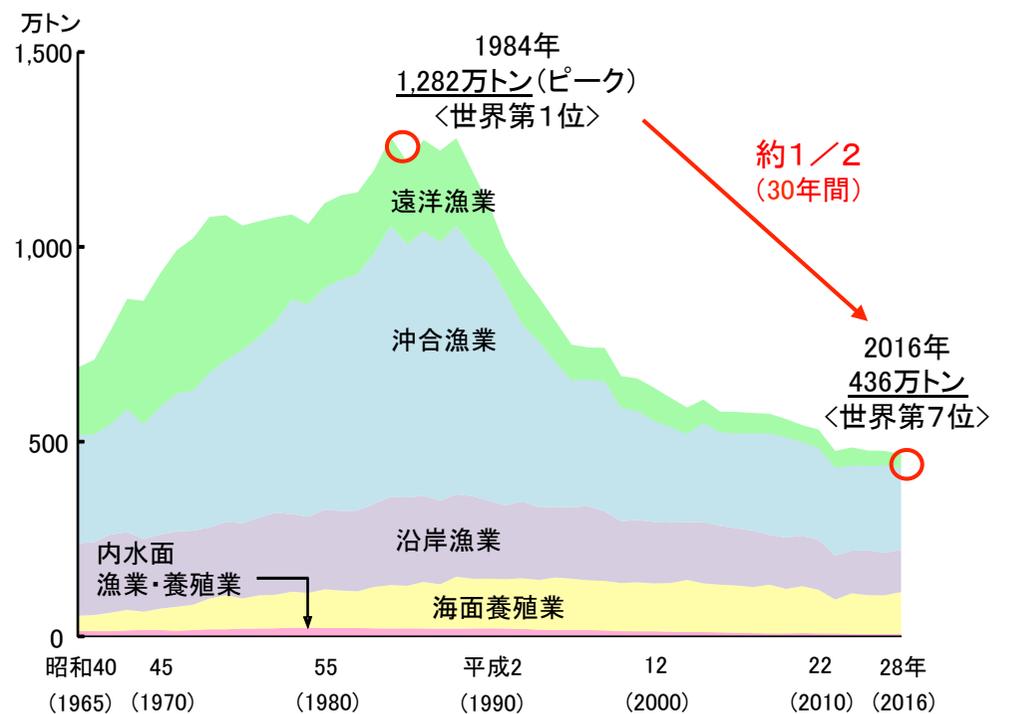
- 世界の漁業生産量は、この30年間で、約2倍。  
一方で、日本の漁業生産量は、約1/2（世界第1位から世界第7位へ）。
- 世界では、養殖生産が、約5割。  
日本では、約2割。

## 世界の漁業生産量の推移



資料：FAO「Fishstat (Capture production, Aquaculture production 1965-2016)」及び  
農林水産省「漁業・養殖業生産統計」

## 日本の漁業生産量の推移



資料：農林水産省「漁業・養殖業生産統計」

# 漁業改革の基本方向

## 漁業をめぐる現状と課題

- 世界の漁業生産が30年間で2倍になる中、日本の漁業生産は1 / 2に。  
(世界第1位(1984年)→7位(2016年))
- 養殖が世界の漁業生産の5割を占める中、日本は2割。
- 日本のEEZは、世界第6位。
- 国の内外から、日本の資源管理の問題が指摘されている。
  - ・ 日本は入口管理 (漁船の隻数・トン数規模など) が中心
  - ・ 欧米は出口管理 (IQなどの数量管理) が中心
- 生産性も、欧米より低い。
  - ・ 漁業者1人当たり生産量は、日本はノルウェーの約1 / 8
  - ・ 漁船1隻当たり生産量は、日本はノルウェーの約1 / 20

## 対応方向

水産資源の適切な管理を前提に、  
漁業の成長産業化・漁業所得の向上  
を目指す。

- ① 資源管理を適切に行う制度に改革  
(出口管理で、持続可能な漁業に)
- ② 漁業許可制度を  
漁業の生産性向上に資するものに改革  
(IQを前提に、漁船の大型化も可能)
- ③ 漁業権制度を  
水域を最大限に活用できるものに改革  
(漁業権を透明化し、養殖を推進)

2018年に漁業法改正

# 持続可能な漁業管理の実施

日本のビジョンと米国の教訓

エリック・シュワブ

EDF海洋部門シニア・バイス・プレジデント

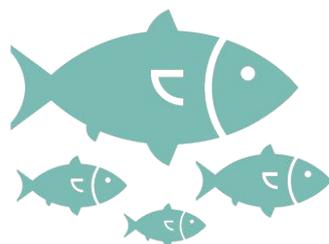
東京サステナブルシーフードシンポジウム

2010年11月7日

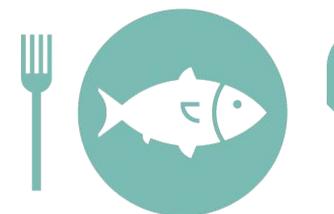
# 日本の漁船は、持続可能な漁業により数十億ドルの利益増加が可能



**55億ドル  
利益増**



**4000万トン  
資源増**



**120万トン  
漁獲増**

現状維持シナリオとの比較

# 米国における商業漁業・遊漁の回復

乱獲状態の資源

↓ 53%



枯渇資源の再生

45種



定期・非定期雇用

↑ 176万人



70%増加

売上インパクト

↑ 2120億ドル



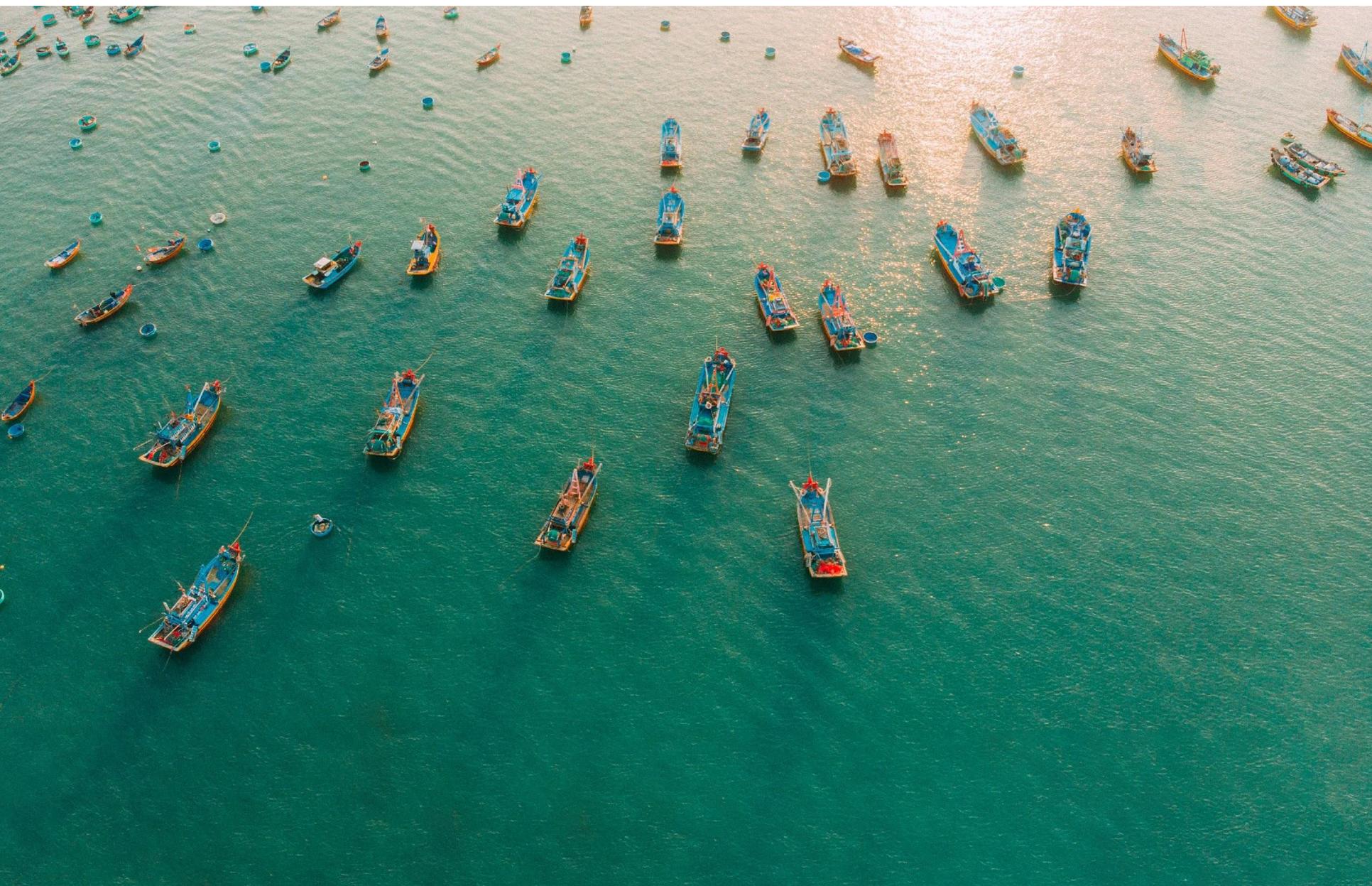
83%増加

科学で決められた  
漁獲可能量

漁業者の説明責任

関係者の関与

権利に基づく管理



# モニタリングにより漁獲の説明責任が改善



# 地域管理機関によって参画を担保



# 気候変動は将来の課題



“

最初はどれだけ漁業に役立つかわからなかったから、[水産改革]に反対した。プログラム開始から5年が経過した現在、メキシコ湾のフェダイ漁業では、より大きな魚を捕獲し、より大きな利益を得ている。水揚げ港での価格が上がり、コストが下がった。

”

